

## 記念講演

# 「国際化とグローバリゼーションのあいざい」<sup>1</sup>

米原 万里（作家・エッセイスト）



私は 20 年間ロシア語の同時通訳をしており、国際会議で国際化という言葉が出てくると自動的にロシア語でグローバリゼーション、英語でグローバリゼーションと訳していました。そこで今日はこの国際化とは何か、ということから話を始めたいと思います。

日本人にとっての国境とは

日本語の国際というのは国と国との間という意味、インターナショナルもそうですね。日本は海という天然の国境に囲まれた国です。その昔遣唐使や遣隋使は命がけで海を渡っていき、無事に帰ってこられるかどうかは分かりませんでした。国と国との間ということは、日本人にとって非常に長い間、非日常的な特別なことだったのです。

ところで、国と国との間というときの国とはいったい何なのでしょう。第一に一定の国土、第二にそこに住む人たち、そして第三にその国土に住む人たちの共通の文化や歴史、その文化の中心に言語や宗教があって、こうした人たちを束ねる国家機関、政府のようなものがある、この三つでできています。この三つが必ずしも全部揃わないことがあります。国土を持たない民族にとっては文化とか宗教とか言語が彼らを束ねる力となり、これに対する思い入れが強くなって非常に排他的になります。

日本のように国土が非常に強固、堅牢な天然の国境に囲まれているとあまり国土という意識を持たなくてすみます。天然の国境が守ってくれるから心の中の国境はどちらかというと低い。そこで他の国とのお付き合い、文化の出会いというものが非日常的で特別なものになります。現在では海がもう国境の役割を果たしていないのに世界とか国際とかという言葉を聞く日本人は興奮します。海が国境だった頃の心のあり方がいまだに続いているような気がするのです。

### 国際化とグローバリゼーションの違い

国境がなくなってきている今でも日本語で国際的というときにはインターナショナルという言葉を使い、国際化というときにもやはり同じ言葉を使っていますね。英語で国際的というときはインターナショナルですが、国際化をインターナショナル化とは言いません。インターナショナル化は国際共同統治を構築するという意味です。

アメリカやイギリスで国際化に相当する言葉はグローバリゼーションです。日本人が国際化というときは国際的な基準が外にあって私たちの習慣や行政のやり方をそれに合わせるという意味で使っ

<sup>1</sup> この講演記録は『東京外語会会報』No. 104, 2005 年 6 月 1 日発行, pp. 16-19 に掲載されました。ここでは東京外語会の許可を得て転載しています。

います。ところがアメリカ人やイギリス人がグローバリゼーションというときには自分たちの基準で世界を覆う、地球を覆うという意味で使っているわけです。自分たちは変わらないで自分を世界の基準にしようというグローバリゼーションと自分たちは異質だから自分たちを国際的な基準に合わせようという国際化とはまさに正反対の概念です。ですから通訳をするときに国際化をグローバリゼーションとするのは実は誤訳ではないのかということになるのです。

### 同時通訳を悩ませるカタカナ語

日本が世界の基準に合わせなければならないと考えるときの世界とはいったい何か。日本にとってその対象国は、ずっと昔から実に長い間中国でした。例えば、今日本語にカタカナ語が氾濫していることが問題視されていますが、その昔日本語に漢語が入り込んだ割合は、おそらく今のカタカナ語の比ではないと思います。このカタカナ語が問題点の一つ。

同時通訳の最中にリレー通訳といって、英語の同時通訳者が英語を日本語にする、その日本語を聞き取って、ロシア語の通訳がロシア語に、フランス語の通訳がフランス語に……というようにリレーしていく。この時に一番困るのは英語の通訳者が英語を日本語にするのをサボって、カタカナ語にしてしまうことです。カタカナ語がいっぱい入った言葉が耳に入ってくるとただ聞いているだけならすぐに流れるのですが、それを聞いて通訳するとなるとその意味を捉えるのに時間がかかってしまいます。カタカナ語はまだ日本語になりきっていない半人前の言葉、これが大半を占めてしまうと意味を捉える中枢がおそらく拒絶反応を起こしてしまい、英語以外の通訳者は絶句して通訳不能に陥るのです。

### 中国文明との出会いと日本語の成り立ち

その昔、本来の日本語にはなかったたくさんの漢語が入ってきて、日本語そのものが変質しました。今の日本語は、中国から入ってきた概念と言葉なしには成り立ちませんね。日本語は外国語の音だけでも入れてしまうという、いい意味でも悪い意味でも開かれた構造になっていますが、これは最初に漢語を入れるときに出来上がったものではないかと思います。意味を十分に捉える暇はないけれどもとにかくどんどん有難く取ってきちゃおうという行動心理学におけるスリコミがあるのです。新石器時代を脱してもう少し経った時期に私たちはそのときまで海に囲まれていたために知らなかった非常に発達した形の中国文明にいきなり出会ってしまった、その時あまりに驚き、感動したものですから私たちの言葉も文字も仏教も、何から何まで無節操に全部取り入れました。私たちは漢字で物事を考えるしかない、特に学問上の言葉や抽象的な概念を表わすためにはヤマト言葉だけでは実際にやっていけない、そこで日本語は外から入ってくるものに対して開かれた言葉となりました。そして私はもしかしたらこれが日本的なものかもしれない、このように考え直す必要があるのではないかと思っています。

### 外国文化の受け入れ

その後の日本の発展の仕方をみていると無節操なまでに全部開き、どんどん外から文化を取り入れる時期と、例えば、江戸時代の鎖国のように貝のように閉じてこれを取り入れない時期がありました。

大陸にある国々と違って、日本は海に囲まれていたため権力者の意思により要衝になるような港を閉じてしまえば鎖国ができたのです。私たちは鎖国というマイナスのイメージ、開国というオープンでプラスのイメージを持ちがちです。ところが日本は鎖国の時代に開国時に無節操に取り入れたものを一所懸命消化し、不要なものを廃棄して日本に向けたものをどんどん自分のものにしていきました。世界的に見て、日本的なもの、日本独自のものとして認められるものは鎖国時代に形成されています。日本は素材として元々あったものと外国から入ってきたものを消化して自分のものにしていきました。

江戸末期、まだ鎖国の時代でしたが、当時のインテリは命がけでオランダ語を学び、蘭学文化が生まれました。17世紀のオランダは黄金時代を迎えましたが、その後転がり落ちるようにどんどん衰退していきました。当時の日本の知識人はこのことを知らずにオランダ語一辺倒だったのです。

ところが明治維新の少し前ぐらいから日本はオランダの学問が世界一ではないことを知って、大慌てで軌道修正をしたり、師匠の鞍替えをしたりしました。相手は欧米の先進国、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカなどでした。そして第二次大戦後はアメリカ一辺倒になりました。このように日本は世界を捉えるときに本当の世界ではなくて、日本にとって世界最強の国を一つ定めてその文化を一心不乱に取り入れようとする傾向がある。日本が外国と接するときこの傾向が非常によく出ています。

## 英語公用語論について

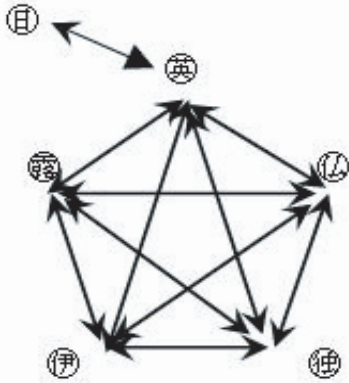
亡くなった小渕首相の諮問機関、「21世紀の日本の構想」懇談会が4年前に英語を第二公用語にすべきであるとの構想を打ち上げました。全社会人が英語を習得し、刊行物はすべて日本語、英語としなければならぬとしています。日本で外国化しようとか国際化しようとかいうときには必ずこうした主張が現れます。1871年（明治）には森有礼が日本語の廃止・英語の採用を、1919年（大正）には北一輝がエスペラント語の採用を、1946年（昭和）には志賀直哉が「日本語を捨て、世界で一番美しいフランス語を喋るようにしよう」と提唱しました。この延長線上に、この平成の時代の英語第二公用語論が出てきます。寄せては返す波のようにこうした議論が定期的に出てくるのが日本人の外国観というか国際観なのです。

でも皆さんがよくご存知のように、ある民族の言語とか言葉というものはドレスやネクタイみたいにとっかえひっかえできるものではないですね。これを簡単に取り替えられると思っているのが日本人の特徴なのです。外国語を公用語にしようと思うのはその国の植民地になったときです。今まで使ってきた言葉を捨てて、よその国の言葉を公用語にすることは非常に珍しいこと、ある意味では非常にオメデタイことです。海という天然の国境に囲まれていたという慣性の法則がまだ生きていたためか自分たちの言葉や文化を自分たちで守ろうという姿勢が全くないのです。国土を持たない民族にとっては言葉を捨てるということは全く考えられないことなのです。

始末が悪いのは英語を公用語にすることが国際化だと思ってしまうことで、これは実は錯覚なのです。昔、鎖国の時代にオランダ語だけで世界を知ろうと思っていたのと同じことなのです。英語ですべてを伝えられるわけではないのです。

## サミットにおける同時通訳の現状

現在ロシアが加わって8ヶ国で行われているサミット（先進国首脳会議）、この30年近く続いたサミットの同時通訳の現状を図に示しました。



この図を見ると日本の国際化がいかに錯覚の上に成り立っているのかが分かります。サミットの参加国を言語別に分類しますと、日本語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語の6ヶ国語あるわけですから6ヶ国語に通訳したら6倍の時間がかかります。同時通訳が入ると話す時間と訳す時間がシンクロしますので、時間の節約になります。この時に例えばフランスのシラク大統領が発言したとするとその発言は直接フランス語から英語へ、ロシア語へ、……と訳され、皆は直接フランス語から訳された言語で聞くわけです。と

ころが小泉さんが聞くのはフランス語から直接日本語にしたものを聞くのではなく、英語に訳されたものをさらに英語から日本語への通訳のリレーが入ったものなのです。小泉さんが発言したときもまず英語に訳され、それを英語とフランス語の通訳がフランス語に、英語とロシア語の通訳がロシア語に、と順次訳します。日本語から英語以外の言語には直接訳されないのです。サミットには英語と日本語の通訳しか行きません。

このようにそれぞれのサミット参加国の言語は、皆直接の関係を往復させる二重の関係でつながっていますが、日本語だけは英語にしがみついているだけで他の言語とは直接の関係を持っていません。私もリレー通訳を何度もやっているのだから分かりますが、逐語通訳だけでも微妙な表現の通訳は通訳が入るだけでかなり質が落ちるのです。リレーをするとさらに大雑把なことしか伝わらなくなる。言葉というのは意思を伝える手段であるだけではなく思考の具でもあるわけですから、世界観が内蔵されています。そこで常に英語経由であるということは、それぞれに伝えられるべき微妙なニュアンスがすべて捨象されるということになるのです。この英語経由のフィルターをずっと続けて何とも思わなかったのはかなり異常な事態です。ちょうど長崎の出島みたいですね。世界と交流するときに日本はこの形を取っているのです。

## 本当の国際化とは

本当の国際化とは、世界にある様々な文化と英語経由、オランダ語経由、中国語経由ではなく、直接の関係をすることなのです。このことは言葉だけではなく、外交についても文化交流についても言えることです。それなのにたった一つの言語を通じて関係を作れると錯覚しているのが日本の実情です。

国際化とは世界最高の基準に合わせることはありません。世界を文化としてみるならばどの国もある意味では同じくらい面白く、同じくらい価値があるものなのです。だからこそその国々と直接関係を築くことが国際化なのですが、そこどころが分かっていない。通訳の数は、英語と日本語の同

時通訳者が、自称を含めて200名くらい。日本の同時通訳者の90%を英語が占め、残りの10%がロシア語、スペイン語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ポルトガル語などとなっています。ロシア語の同時通訳者の数は6名くらいか。そのくらい異常な形になっているのは日本人の頭の中にできる情報の地図が英語経由のものになっているからです。これでは日本人の精神を非常に貧しくすると思います。

国際会議で色々な言語の通訳者と一緒になると皆自由業ですから非常に活発で、話題も豊富、批判精神や複眼思考を習慣的に身につけた面白い人が多いのですが、その中でも英語通訳者にはこのような面で弱い人が多く、つまらない。その最大の理由は、私たちが自分が学んだ外国語を絶対化するという病気に罹っている、自分が最初に身につけた外国語が殆どの場合英語だからということなのです。

### 英語以外の外国語も身につけよう

ここで大切なことは、もう一つ別の外国語を身につけ、それによって英語を突き放して冷静に見ることです。なぜ英語の同時通訳者がつまらないのかといえば、彼らが英語しかできないからです。日本では英語は義務教育で皆学ばされるので、ロシア語であれフランス語であれ中国語であれ、同時通訳者は英語を一応はかじっているのです。だから日本語、英語ともう一つの専門語の最低三つができるわけです。英語一辺倒だと一途になり、出会いもそうですけれどだいたいフラレルのです。同時通訳という特化した職業からこのことを言っているのですが、実はこの傾向は日本の外交官や外交にも出てきているのではないかと思います。

### 終わりに

グローバリゼーションと国際化は、本当は正反対の概念ではなく、実はこの二つはセットになっているのです。世界最強の国に合わせようとする国際化というのは世界最強の国が自分の基準で世界を覆おうとするグローバリゼーションと観点が正反対なだけで実はピッタリと合っています。コインの裏表です。この両方とも本当の国際化ではありません。本当の国際化はその外にあって、実はこの方がかなり困難なことだけでも、面白い道であると思います。皆さんには経済力や文化力から離れたところにある世界の文化、言語というものを見て、それと日本語との直接の関係を築いていってほしいと思っています。そしてこれが本当の国際化ではないかと思うのです。